

論文要約

中葉 芳子

『源氏物語』享受史の研究、と題しました当該学位請求論文では、中世から江戸時代初期までの人々が『源氏物語』をどのように享受していたのかを考察したものです。

第一章の「関西大学総合図書館所蔵『源氏物語』の本文」では、関西大学総合図書館に所蔵される『源氏物語』の写本が、中世後期から『源氏物語』研究において中心であった三条西家に関わる『源氏物語』本文の性質を理解するための一助となる可能性と、外題執筆者だと考えられる中院通村の書写活動と本文系統との関わりを明らかにしたものです。

第二章の「『源氏物語』の注釈」は、第一節で一条兼良の『源氏物語』研究を、応仁の乱との関係から述べています。兼良以前の注釈書とは異なる『花鳥余情』は、応仁の乱を経ることできあがったものであったことを明らかにしています。第二節、第三節は、『花屋抄』に関する論考です。『花屋抄』は、女性である花屋玉栄が「おさなき人・女達」のために著わしたという他に例を見ない注釈書で、当時の研究的な『源氏物語』注釈とは一線を画するものであることを明らかにしています。

第三章の「中世源氏物語の世界」では、『源氏露』を中心に、他の「中世源氏物語の世界」を書きとどめている注釈なども参看しながら、連歌師たちが伝えていた「源氏学」を明らかにしようとしたものです。

第四章の「『源氏物語』の古筆切」は、第一節、第二節で『源氏物語』梗概本の古筆切を取り上げて、南北朝期以降のものしか完本では現存しない梗概本が、中世の初めから作られていたことを明らかにしたものです。そして、その梗概化の方法が、鎌倉期とそれ以降では異なることも考察しています。第三節では、『源氏物語』夢浮橋巻の続編を描いた『山路の露』本文の新たな古筆切を紹介するとともに、新出断簡の本文を合わせ考えることで、『山路の露』の本文系統への一石を投じたものです。